金相寺　寺報

遇 ～ぐう～

Encounter magazine “Guu”

篠画伯作・金相寺

9月

December ２０１３

No.5

紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。
その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。
悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。
ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思います。

●比叡山下山と六角堂参籠

大乗院の夢告の翌年、正治三年＝建仁元年（一二〇一年）、親鸞聖人は、比叡山での二十年におよぶ修行でも魂の解決ができず、精も根も尽き果てて、ついに二十九歳の春、天台宗の教えに絶望し、下山を決意します。

下山された親鸞聖人は、聖徳太子が建立したと伝えられる六角堂（紫雲山頂法寺）に百日の参籠を決意されました。

親鸞聖人が六角堂参籠を決意されたきっかけは、おそらく、法然上人の噂を聞かれたからだと考えられます。京都東山の吉水の地に法然上人という方がいて、出家・在家を問わず、念仏一つで、すべての人が救われる道を説いておられるという噂でした。この法然上人を慕い、多くの人々が集っていましたが、従来の仏教の教えを守っている人々は、出家の者も在家の者も、持戒の者も破戒の者も、平等に救われるなどありえないし、そのような教えは、世の中を乱す、とんでもない邪説であると、激しく批難していました。

しかし、比叡山での修行に行き詰まりを感じていた聖人は、法然上人の教えに強く引かれるものがありました。ただし、この比叡山を捨てて、法然上人のもとに行くことは、とても大きな決心のいることでした。その最終判断を、六角堂参籠によって、聖徳太子の指示を仰ごうとされたのでした。

六角堂（紫雲山頂法寺）

この六角堂参籠を通して、親鸞聖人は有名な「女犯の夢告」というお告げを聖徳太子よりあずかったといわれています。その内容は次回、詳しくお伝えしたいと思います。

【禍福】

当寺は昭和五十四（一九七九）年開基の全く新しい寺である。昭和五十（一九七五）年一月、先考の勧めを受け、真宗寺院を建立すべく、相模原の地に愚生は訪れた。

当地に来て、まず寺院建立に必要と思われる四百坪程の土地を捜すべく、有縁の方々に依頼したところ、間無しに三カ所の物件の照会が齎された。斡旋を受けた三件の中、特に二件の物件は、当地において、価格、交通の便等々を鑑みて、これ以上の好条件の土地はないのではと考え、話を進めようとしたところ、なぜか二件とも地権者の方の都合で断念せざるを得なかったのである。人間の心理というものか、頓挫した二件の土地が、寺を建立するにはまたとない土地に思われ、その時は非常に残念で仕方がなかったのであるが、しかし暫くして、また新たに別の土地の紹介が齎された。その土地こそが現在金相寺が建っている土地である。今でも前に求めようとして断念せざるを得なかった処の前を車で通ることがあるが、寺を建立する環境としては比ぶべくもない程、現在の地は良好である。最初に紹介された土地の譲渡の話がスムーズに進んでいたらと思うと、不可思議な因縁を喜ばずにいられぬのも事実である。また、寺の裏に増設された墓地の件でも、同様の思いがある。

確か平成五（一九九三）年の春であったと思うが、寺の東側の現在駐車場になっている処の地権者の方が寺に来られ、今までは緑地保全地区のため開発ができなかったが、この度開発許可がおり、資材置場として貸し出すという事であったので、寺としては「荘厳仏事を為す」という言葉もあるように、景観は最も大事な部分であり、何とか景観を守らねばということで、地権者の方に土地を譲ってもらい、墓地として景観を守ろうと考え、地権者の方に譲渡の話をしたところ、貸出しか考えていないということで、墓地の件は断念せざるをえず、どうしたものかと悩んでいたところ、寺の裏の現在墓域になっている土地の地権者の方から「お寺が墓地の計画をお考えなら、寺の裏の私の土地六百坪をお譲りしますよ」とのお話があり、それならお譲り下さる寺の裏側の土地を墓地にして、東側の貸し出すとされる土地は駐車場として借り入れて、廻りの環境景観を守っていこうという計画が出来上がったのである。当処問題となった現在の駐車場の土地の当時の地権者の方が、土地は譲渡しないで貸し出すという強い考えがあったので、景観上如何に対処すべきか苦慮していたのであるが、そのことが寺としてよりよい景観環境を守ることができる結果を齎してくれたこ

とになったのである。「禍福は糾える縄の如し」「人間万事塞翁が馬」といった格言があるが、寺建立の用地の件といい、墓地増設によって景観を守らんとした件といい、この格言を彷彿させる流れではあった。

当寺建設中の様子

しかし、この様なことは、一般社会通念上云えることであろうが、仏法を通して見た時、個人の、或いは周の都合のよしあしで一喜一憂することは、全くの迷妄でしかない。唐代の禅僧大梅山法常禅師に「随流去」の一語ありと聞く。我々が健康に留意することは当然としても、何人も逃れ難きは老病死なれば、年老いたら老人に、病をえたら病人に徹することだ。それを老いてもなお壮年の頃を、病んでなお健康な時期を夢見ているのが吾人の常であるが、それは愈々苦悩を募らせ、迷妄の底に堕しめることになるということを「随流去」の一語は説き示しているように思われる。また、晩唐の禅僧普化和尚に「明頭来也明頭打　暗頭来也暗頭打」の一句あり。順境にあれば順境に、逆境にあれば逆境に徹するということか。吾人は逆境にあると、その逆境から逃れんとして、色々踠く。それによっていよいよ苦境に堕ち入る。水に溺れた者が、踠けば踠くほど、水に沈むことになる如くに。

良寛さまには「災難に遇う時節には災難に遇うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがれる妙法にて候」と、震災で被害を受けた友人に送ったとされる有名な見舞いの手紙がある。法常禅師の「随流去」といい、普化和尚の「明頭来也明頭打　暗頭来也暗頭打」といい、相通ずるものを感じる。

親鸞聖人は『浄土文類聚鈔』の中で、「心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法海に流す」と仰せられてある。念仏にご縁をいただくものは、軸足を念仏の大地に樹て、万川が一味の潮に流れ込む如く、一切の妄念を念仏の法海に流す。「こうなれば好都合だ。こうなったら不都合だ」「こうなったら仕合せだ。こうなったら不幸せだ」といった計らいは、全て迷妄と振り捨て、「禍福」にとらわれた狭い穢土を超え、「広大にして辺際なき」浄土往生の大道が、念仏の一念で開かれる。

勝った、負けた。好きだ、嫌いだ。損だ、得だといった差別相対の娑婆世界に執着する道は、いよいよ迷妄の中に沈んでいく以外にない。その様な人生で終わるとしたら、「空過」の一生と云わなければならない。

成田　宣信（金相寺住職）

御同朋の声

【金相寺との出会い】

畠山 省治氏
（金相寺門徒総代）

縁あって相模原の田名に父母と妻、それに二人の子どもの六名で移り住んだのが、今から四十二年前。ある時、車で通勤途中の林の中にお寺が建ち始めていました。父の岩手県の菩提寺と同じ、浄土真宗の寺院でした。その後一年ほどでお寺は完成した様子で、何となく気にはなっていましたが、その当時は特別ご縁をいただいていたわけではありませんでした。ただ、出勤時の折、山門脇の掲示板に書かれた法語を見ては、判らない文字があると、後で辞書で調べたりしておりました。

そんなある日、三歳で亡くなった私の妹と、十六歳で亡くなった弟の法事を当地（相模原）で勤めようという事になり、初めて金相寺の門をくぐった次第です。ご住職は快く受けて下さり、自宅で執り行いました。

暫くして金相寺にご挨拶に伺ったところ、ご住職が寺のお内仏に安置されていた阿弥陀如来像を取り出されて、「この如来像は、私が若年の頃ご本尊として拝んでいたご仏像ですが、お宅のお内仏のご本尊として荘厳されては」と私に渡して下さいました。手にいただいた瞬間、涙が溢れました。家に戻り住職から渡されたご本尊を父母に見せると、ただただ手を合わせ、涙を流し喜んでおりました。家の仏壇は父の実家から戴いた親鸞聖人像のお掛け軸をご本尊として荘厳していましたが、金相寺のご住職が「真宗のご本尊は弥陀一仏です」と言われ、お渡しくださったのです。

その後、母九十三歳の葬儀は母の遺言通り自宅で執り行い、また弟五十歳の葬儀は東京の斎場までご住職にご足労いただくと共に、遺骨も安置していただき、納骨まで見届けていただきました。また、父九十歳の葬儀は相模原の斎場で執り行いました。そこには副住職もお見えになられ、お二方での法要は美事で、厚く感謝いたしております。

現在私は、金相寺の法要行事に、ご案内は必ずいただきながら参加できておりません。心苦しく申し訳なく思っております。しかし、今後できる限り参詣させていただける環境を整えていければと思っております。それまで妻や子ども達とも話をしながら、静かなお付き合いをさせていただければと思っております。

合掌

正信偈勉強会
学習報告

【原　文】

釈迦如来楞伽山　為衆告命南天竺
龍樹大士出於世　悉能摧破有無見

【読み方】

釈迦如来、楞伽山にして、衆のために告命したまわく、南天竺に、龍樹大士世に出でて、ことごとく、よく有無の見を摧破せん。

【意　訳】

釈迦如来は楞伽山において、大衆のためにお告げになられた。南インドに、龍樹という菩薩が世に出て、ことごとく、肯定と否定のこだわりを砕き破るであろう。

凡夫というのは、煩悩にまみれた愚かなあり方をしているのだと、釈尊は教えておられます。私たち凡夫は、浅はかな知識にたより、限られた経験にもとづいて、自分本位にものごとを判断します。そして、それがあたかも「事実」であるかのように錯覚してしまうのです。要するに、ほしいままに、自分が思いたいように思い込んでいるだけですから、それは「事実」ではないわけです。

実在するのか、実在しないのか、そのようなことよりも、「実在する」とか、「実在しない」とか、そのように自分勝手に思い込んでこだわる、そのような「思い」や「こだわり」から、まずは離れる必要があると、龍樹大士は教えておられるのです。そうでなければ、自分が迷いを深めて混乱するばかりか、他人をも混乱させて苦しませることになると教えられるのです。

（『正信偈の教え・中』本文より）

～所　感～

今回の勉強会では、浄土とはこの世にあるのか、あの世にあるのか、という問題について話し合われました。これは非常に大事な問題です。

私が京都で大変お世話になった竹中智秀先生は浄土ということについて次のようにおっしゃっています。

念仏者として心境としての浄土をその心に持って、ここ娑婆世間の只中にあって縁ある人々と御同朋として出遇いながら共に生き、やがていのち終わる時には環境としての浄土、それは法性のみやこ」であるのだが、そこに帰って法身と申す仏」になるという浄土真宗独自の三世観がある。

浄土とは、阿弥陀仏の本願を思い起こす時、いつでも・どこでも、この娑婆世間のただ中に開かれる世界であり、またいのち終える時に還っていく、存在の故郷であると教えていただきました。

釋宣明

青年会だより

金相寺青年会“無意味の会”では、月に一度２０代から４０代の青・壮年層が集い、日々追い求める意味の世界から一歩離れ、日頃感じていることや、関心を持っていることなど、自らの、そして目の前の友人の言葉に耳を傾け合いながら、それぞれの存在を確かめるべく、語り合っています。

憲法問題について考える

今から六年前の第一次安倍政権時代に、たまたま縁あって、憲法学者の伊藤真さんのお話を聞かさせていただきました。憲法とは一体何なのか？私たちにとってどういう意味を持つものなのか？全くの無知だった私にとって、伊藤さんのお話にはとても驚かされました。

その後、政権は自民党から民主党へと変わり、憲法改正問題はいったん治まったかのように思えました。しかし、再び自民党が政権を取り戻し、第二次安倍政権が始まると、憲法改正問題は再燃し、今、私たちに大きな問いを投げ掛けています。

伊藤真さんは著書『憲法の力』（集英社新書）の冒頭で、憲法という私たちにとってとても大切な問題が変えられようとしているにも関わらず、国民に関心があまりないのは、「みんなで憲法の話をしてこなかったからだ」と指摘されています。

青年会ではここ数回にわたって、参加者からの発題がない時は、憲法問題について基礎から学び、語り合う場を持ってきました。それぞれがそれぞれの立場や考えを持っている。それは当たり前のことで、だからこそ、それらを背景に語られる相手の声に耳を傾け、また自らの声を発しながら、議論を重ねてみると、今まで考えもしなかったようなことが見えてきたり、発見があったりします。

議論するというと、賛成派と反対派、どちらが勝つかというような縮図になりがちですが、そうではなくて、自らの問題として考え、向き合うために議論を重ねるのです。

また、憲法問題というと、難しくて自分には関係ない問題と思いがちですが、決してそうではなくて、私たちの身近な問題として、向き合い、議論していく必要があると思うのです。簡単に答えが出るような問題ではないからこそ、今後も長い時間をかけて議論を重ねていきたいと思っています。

副住職の

日々の出遇い

●夏の子ども会ご報告

七月二十八日（日）、夏の恒例行事となりました、金ピカキッズ・夏の子ども会を開催いたしました。

今年は金相寺責任役員の森さん、篠さんのお二人から、戦争体験についてそれぞれお話をいただきました。

実家の山形で疎開してきた子ども達を迎え、共に過ごした森さん

森さんは、戦争中は実家の山形で過ごされました。山形市内は軍事工場などが多くあったため、被害も大きかったとのことですが、森さんが住む村は山間部の農村だったため、空襲などの被害は受けなかったとのことです。ただ、多くの子ども達が疎開してこられたとのことで、食糧難で食べるものがない中で、疎開してきた子ども達と野山の木の実や山菜を採って食べたご経験など、その当時の様子を詳しく語っていただきました。

一方、当時実家のあった東京の世田谷に疎開せずに残られ、実際に空襲などを経験された篠さんは、プロの画家ということもあり、当時の様子、ご経験を絵に描いて来てくださり、それをもとにお話をいただきました。

東京で実際に空襲を経験された篠さん

太平洋戦争も末期(昭和二十年頃)に入ると、アメリカ軍による一般市民を巻き込む無差別空襲が行われます。東京でも多くの空襲が行われ、篠さんは五月二十四日、その中のひとつ、山の手空襲にあわれます。それらの空襲で投下された焼夷弾によって東京は焼け野原になってしまったそうです。

アメリカ軍の戦闘機と焼夷弾

逃げている途中、二～三メートル先を逃げる近所の女の子が小型焼夷弾に当たって即死したことは今でも忘れられないとおっしゃっていました。

玉音放送を焼け野原の中
直立不動で聞いた姿

また、終戦を告げる天皇陛下の玉音放送は小さい子どもも含め、みんな泣きながら直立不動で聞いたとのことでした。この一～二時間前には逆に日本が戦争に勝ったという噂が流れ、大喜びしていたそうです。

また、森さんも仰っていましたが、終戦後は食糧難の時代で、近所の雑草まで綺麗になくなったそうです。そんな状況の中、空襲だけでなく、栄養失調で多くの友達を失ったとのことでした。

最後に、「戦争は本当に嫌です。あなたたちには決してこのような思いはしてほしくない」とおっしゃられたそのお言葉が、とても心に響きました。

子ども達にとって私たち親の世代はもちろんのこと、その親、つまり祖父母世代ですら戦争を知らない世代が増えてきました。そんな中、貴重な体験談をお話しいただき、とても大切で尊い体験となりました。森さん、篠さん本当にありがとうございました。そして、ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。

次回の子ども会は十一月九日に青年会と合同で親鸞聖人御命日の集い・報恩講を開催致します。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加下さい。

※ 篠さんがお描き下さった絵はホームページの「報告・日誌」にて全てご覧いただけます。

今後の予定

法要

九月二十三日　秋彼岸会
十一月十日　報恩講

勉強会など

十月五日　午後二時～
正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）
※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の第一土曜日に開催予定。

十一月九日　午後一時～
子ども会・青年会報恩講
※詳細はホームページをご覧下さい

毎月一回　仏教青年会
※毎月の開催日等、詳細はホームページをご確認いただくか電話・メールにてお問合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

「いのちはそれを愛そうとする者に属き従うものであって、それを傷付けようとする者には属き従わない」

「いのちは誰のものか」という講題で京都の専修学院の竹中院長先生が話されたお言葉です。そして、先生は続けてそれは「いのちの法則」であるとおっしゃられました。

一方で私たちは、その「いのちの法則」に背き、常に「我」を立て、他者と対立し、時に「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と、他者を傷つけるようなあり方をしています。

この二つの身の事実と向き合うことなしに、本当の意味での戦争問題や憲法問題の解決はないのではないかと最近強く感じさせられます。「我」を立て、自らの立場を正当化するようなあり方からは、どこまでいっても対立しか生まれません。どこかの、誰かの問題ではなく、今ここの私自身の在り方が問われていると改めて教えられています。

合掌

『遇～ぐう～』第五号
発行　浄土真宗　霊苔山　金相寺
副住職　成田　宣明
〒252-0328
神奈川県相模原市南区麻溝台７２６-１
TEL&FAX　042-778-2879
e-mail　konsouji@aria.ocn.ne.jp
URL　http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/
発行日　二〇一三（仏歴二五五六年）年九月一日